

貨客混合レで、燃える黒ダイヤを求めて

埼玉県立川越工業高等学校 No. 140

戦後しばらく北の大地はぼ中頃、黒いダイヤの採れるヤマへは省線石勝線夕張支線清水沢からのびる三菱石炭鉱業大夕張鉄道線で。乗るは機関車後ろに空の貨車を連ね、その更に後ろに見える薄緑帯の入る客車。中にはストーブもあるが今は夏。煙も昇らぬストーブには些か寂しさを感じる。乗降扉と窓を開ける薄緑帯の映える客車は煤が香り、風通りのいいもので煙草も吹かしたくなるもの。気づけば炭住の建ち並ぶ明石町駅、降りた生徒はこの時間では間に合わなかろう。再び走り始めしばらくの橋梁を走るドラフト音は貨車のせいで遠く、あまり聞こえるものでは無かった。まもなく着くは映画館も銀行もあり商業施設の建ち並ぶ大夕張駅、清水沢から一時間と少しのこの街に生活物資を運ぶには今乗る鉄道は必要不可欠。再び走り始めた汽車は煙草を一本吹かすのにちょうどの時間で終点大夕張炭山へ。ホームから望む黒いダイヤの多く採れるこの夕張のヤマで私は身を粉にする。